令和7年度特色入試問題

《文学部》

論文試験

A～Cの3段階評価

(注　意)

1. 問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
2. 問題冊子は表紙のほかに9ページある。
3. 解答冊子は表紙のほかに4ページあり，そのうち「ます目」の部分が解答欄である。なお，別に下書き用紙4ページを配付する。
4. 試験開始後，解答冊子の表紙所定欄に受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には，これら以外のことを書いてはならない。
5. 解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
6. 解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
7. 解答冊子はどのページも切り離してはならない。
8. 問題冊子および下書き用紙は持ち帰ること。解答冊子は持ち帰ってはならない。

問　次の二つの文章を読み、以下の問いに答えなさい。なお、解答の中では、問題文Ａ（英語）の筆者をＡ、問題文Ｂ（日本語）の筆者をＢと表記すること。

（１）　問題文Ａの筆者の主な考えをまとめなさい。(400 字以内)

（２）　問題文Ｂの筆者の主な考えをまとめなさい。(400 字以内)

（３）　二つの文章をふまえて、歴史における個人と全体の関係について、あなたの考えを述べなさい。(800 字以内)

問題文 A

問題文 Aは出典のみ公開する。

Paul Thompson with Joanna Bornat, The Voice of the Past: Oral History, Oxford University Press, 2017 より。 一部改変

問題文B

人々が世界史に向き合うのは、学校や図書館だけではない。生きている折々の局面の中で、「危機の瞬間にひらめく想起」（ベンヤミン『新訳・評注　歴史の概念について』二〇一五：四九頁）として、過去に生きた世界の人々の姿や時代のイメージが人々の心をとらえ、人々を突き動かす。

二〇一一年三月一一日の夜、四人の消防士が滞在先の都内のホテルで夕食をとっていた。そのうちの一人は、この夕食が「最後の晩餐」だと思ったと後に証言している（吉田　二〇二〇：四〇頁）。その日の午後二時四六分、日本の三陸沖でマグニチュード九・〇の超巨大地震が発生し、東北から関東にかけての広い範囲で震度7から6を記録し、観測史上未曽有の大津波が東日本の太平洋岸を中心とする広い地域を襲っていたからである。彼らは福島県の双葉（ふたば）消防本部の消防士で、全国消防駅伝大会のために都内に滞在しており、激しい交通渋滞のためにやむなくホテルにとどまっていた。地震発生から約一時間後、福島第一原子力発電所から基準以上の放射能が漏れているという「原子力災害対策特別措置法第一〇条第一項の規定に基づく特定事象」（いわゆる「一〇条通報」）が消防署に通報されていた。さらにその一時間後、原子炉がコントロール不能になっている「一五条通報」が出されていた。その頃、現地にいた双葉消防本部の消防士たちは、死に物狂いで地震と津波の被害者たちの救助活動にあたっていた。

翌一二日午後三時三六分、浪江（なみえ）消防署の消防士は、パーンという乾いた音を聞き、空気の振動を感じた。キラキラ光る細かい粒子が空から降ってくるのが見えた。発電所一号機の原子力建屋の上部が水素爆発で吹き飛んだ瞬間だった。救助活動をしていた川内（かわうち）出張所の消防士が帰所して受けたスクリーニングでは、サーベイメーターが二万一〇〇〇cpm を示したという。この日の夜から、圧力が異常に上昇した一号機の格納容器が壊れることを防ぐために、内部の蒸気を抜く「ベント」という作業が、発電所の職員たちの必死の努力で行われていた。しかしベントのことは消防士たちに知らされず、一三日の午前中、消防士たちは立ち上る白い煙の下で、発電所に淡水を搬送する任務にあたっていた。

一四日の午前一一時〇一分、発電所三号機で、より大型の水素爆発が起こり、消防士たちには、大至急一〇キロ圏内から退避するよう無線が入った。救助した人を全力で運んだ消防士が葛尾（かつらお）出張所に帰ったとき、「爆発しました。世紀末みたいになっていますよ」と同僚が話しかけてきた（吉田　二〇二〇：九一頁）。

一五日の夜、川内出張所に集められた消防士たちに、原子炉を冷却するために、発電所に出動して海水をポンプで汲み上げてほしいという要請が、東京電力からあったこと

が告げられた。「殺す気なのか！」「反対だ！」という怒号がとびかった。多くの消防士たちが、ソ連（当時）のチェルノブイリ原子力発電所の事故の際に消火活動にあたった男たちがその後にたどった悲惨な運命を思い浮かべていた。「これでは特攻隊と同じではないか」と彼らは思った（吉田　二〇二〇：一二〇頁）。任務にあたるかどうかの結論は出ず、明日に持ち越すことにしたが、多くの者が泣き、その夜、家族・友人への遺書を書いた。

一六日の朝六時前、発電所四号機で火災が発生したため、消防士たちは出動した。涙を流しながら敬礼する同僚たちに見送られて、車両が出発していった。ひとりの消防士は「きっと特攻隊はこうだったのだろう」という思いで発電所に向かったと、のちに語っている。別の消防士は、こうした日々が「国や県の記録に残っているだろうか」と今でも考えているという（吉田　二〇二〇：一二八―一二九頁）。

こうした双葉郡の消防士たちの「3・11」を私たちがまとまった形で知ることが出来たのは、九年後の二〇二〇年になってからのこと。吉田千亜のルポルタージュ『孤塁――双葉郡消防士たちの3・11』（二〇二〇）が世に出たからであった。これは、吉田が関係者に徹底した聞き取りを重ねて完成させた、すぐれた「オーラル・ヒストリー」による現代史でもある。そして、吉田が描いた一人ひとりの消防士たちもまた、「3・11」の極限状態の中を生きぬくときに、「過去」の人間たちの姿やイメージを引照しながら、自分の生きている位置を見定め、自分の進むべき道を決めようとしている。そのとき「過去」によって世界のなかの自分を定位しているならば、それは世界史を考えていることになるだろう。双葉郡の消防士たちは、福島第一原子力発電所が制御不能の事態となり爆発を繰り返すなか、「最後の晩餐」とか「世紀末」といった「過去」のイメージを想起しながら、この世の破局を予想した。しかしやがて、孤立無援のなかで非情なミッションが課せられることで、消防士たちはチェルノブイリの消防士や日本の特攻隊員たちの姿を想起し、そうした事態をひきおこした国家への憤りとともに、破局を回避するために自分を犠牲にしなければならないという決意を固めていったのだった。

歴史とは、歴史学者や歴史教育者だけが探究するものではなく、様々な人々が日常生活の中で参照し、それをもとに行動するものでもある。そうした意味で、歴史を探究することをアカデミックな「歴史学」よりも広い視野でとらえ、これを「歴史実践」という概念で表現する論者が多くなってきている。歴史実践という問題提起をきわめて鮮烈な形で行ったのは、オーストラリアの先住民アボリジニの歴史意識を分析した、文化人類学者の保苅実（ほかりみのる）（一九七一―二〇〇四）の遺著『ラディカル・オーラル・ヒストリー』（二〇〇四／二〇一八）である。保苅は、「日常的実践において歴史と関わりを持つ諸行為」を「歴史実践」と名付け、それは歴史学者による歴史研究や、学校の授業などより

もはるかに多様な、人々が歴史に触れる広範囲な営みであると指摘した（保苅　二〇一八：五〇頁）。歴史実践とは、時間軸を意識して他者と自分との関係を考えることであるとすれば、そうした他者は、自分と同じ地域・国に生きた他者の場合もあるし、異なる地域・国に生きた他者の場合もある。その意味で、歴史実践とは「世界史実践」と言い換えることもできよう。「世界史」とは、学校教育でイメージされてきた「外国史」にとどまるものではなく、人々が生きる地域（ローカル）、国、複数の国を包む広い地域（リージョン）、世界といった、重層的な空間の歴史を総称する概念ととらえたほうがよいからである。

その場合、世界史実践には、二つの形がある、と私は考えている。一つは、「世界と向き合う世界史」である。フクシマの原発事故の中で必死に活動を続けた消防士たちがそうであったように、人は自分の置かれている状況や自分の進むべき道を考える際、この世界に生きた「過去」の人々や時代のありようを参照する。そしてフクシマの消防士の記憶を吉田千亜が記録にまとめたように、未来の人々が「過去」の人々の軌跡に対峙できるように、人々の世界史実践のありようを記録・叙述して忘却に抗おうとする。消防士たちも吉田も「世界と向き合う世界史」を実践しているのである。こうした世界史実践は、特定の時代の事件・事象を切り出して、テーマ設定に基づく歴史叙述を創造する。たとえて言えば、地域別・国別に構成された世界史年表のなかの特定の事象をめぐる歴史叙述と言えよう。

それに対して、もう一つの世界史には、歴史年表の事象の関係を大きくつなぐ「世界のつながりを考える世界史」がある。たとえば、「3・11」の惨事を受けて、人類と科学技術との関わりを根底的に問い直した、科学史家・山本義隆の一連の著作がある。山本は、思弁的な論証知と技術的な経験知を結合させた近代ヨーロッパ文明の独自性に着目し、ガリレオに始まるそうした自然への新しい向き合い方が、一七世紀のベーコンに見られるような「技術が自然と競争して勝利を得ることにすべてを賭ける」まなざしをうみ、やがて一九世紀のファラデーの電磁誘導の発見により、科学理論が先行する形での技術開発、つまり「科学技術」が始まっていくことを描き出す。やがて一九世紀後半の「大不況」による資本主義社会の危機や二〇世紀初めの第一次世界大戦の危機のなかで、国家主導による資本主義経済の立て直しと科学技術の推進が追求されるようになる。そして第二次世界大戦中のアメリカでは、ニューディール政策の延長線上に「マンハッタン計画」による原子爆弾の開発が進められ、それが戦後に「原子力の平和利用」という掛け声のもと、核爆弾を大国が独占しつつ、ある程度の技術を民間に公開して原子力発電を推進させることで、核技術の維持と進歩をはかる政策につながっていく（山本『福島の原発事故をめぐって』二〇一一）。こうした欧米の科学技術の歩みを近代日本が導入し、明治期の「殖産興業・富国強兵」、アジア・太平洋戦争期の「高度国防国家建設」、戦後の

「経済成長・国際競争」というように一貫して「科学技術総力戦体制」を発展させてきた。これが「3・11」によって破綻したのだと、山本は分析する（山本『近代日本一五〇年』二〇一八）。ヨーロッパやアメリカの科学技術の展開と日本のそれを関連させながら、現代日本の科学技術のあり方に再考を迫る、山本の一連の仕事は、現代的な問題関心に基づいて、大きな時間軸と空間軸の中で歴史事象の構造的な展開を追究する、「世界のつながりを考える世界史」のすぐれた一例であると言えよう。

学校の教室で学ぶ世界史とは、各地域・各国の歩みが横並びに陳列されたものであり、それもまた典型的な「世界のつながりを考える世界史」である。多くの人々にとっては、教養形成として「世界のつながりを考える世界史」について学ぶ経験を重ねながら、生きるそれぞれの局面において「世界と向き合う世界史」を考えるというのが、世界史実践のありようではないだろうか。そして歴史を研究したり教えたりすることを職業とする歴史家、歴史教育者は、「世界と向き合う世界史」の探究を重ねる中で、それらの集積としての「世界のつながりを考える世界史」を考察していく。そして「世界のつながりを考える世界史」は、新たに生まれる「世界と向き合う世界史」の衝撃と蓄積によって更新されていく。世界史とは、このような二つの世界史実践の総体なのではないだろうか。

（小川幸司「〈私たち〉の世界史へ」（小川幸司ほか編『岩波講座 世界歴史 1』岩波書店、2021年所収）より。一部改変）